

御蔭一本木遺跡第1次発掘調査概要

資料提供目

令和8年2月5日(木曜日)

調査の概括事項

調 査 名：御蔭一本木遺跡第1次発掘調査

調査の内容：弥生時代の竪穴建物跡 1 棟、土器溜り 4 基、埋甕 1 基、土坑、溝
奈良時代の掘立柱建物跡 2 棟、
平安時代の掘立柱建物跡 1 棟、柵跡、土坑、溝ほか

調査期間：令和 7(2025)年 11 月 27 日（木）～3 月上旬予定

調 查 原 因：市道豐富南北線建設事業

調査面積：1679 m²

遺跡の概要

調査地周辺には横山古墳群 1・2 号墳（兵庫県指定史跡）や王塚古墳、古墳時代後期から中世にかけての集落遺跡である御蔭中筋遺跡、戦国時代の太尾城跡などが存在する。

今回の調査地は、昨年市道豊富南北線建設事業に伴って、実施した試掘調査で発見された御蔭一本木遺跡に該当する。同遺跡は弥生時代から中世にかけての集落遺跡で、調査は今回が初めてである。

調査の概要

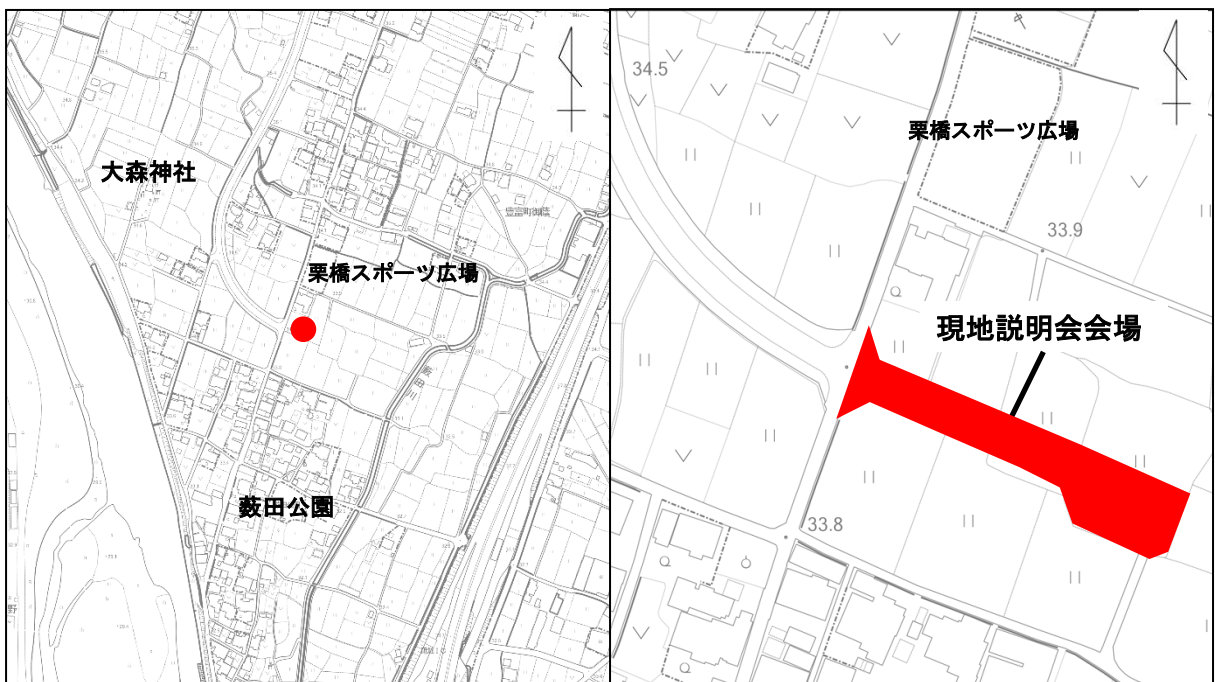
今回の調査では、弥生時代の竪穴建物跡 1 棟と土器溜り 4 基、埋甕 1 基、奈良時代の掘立柱建物跡 2 棟、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟のほか、土坑約 80 基、ピット約 200 基、溝 15 条などを検出した。特に弥生時代中期後葉(紀元前 1 世紀～紀元 1 世紀前半頃)の竪穴建物跡 1 棟を確認し、サヌカイト製の石剣が出土した。

- ・ 竪穴建物跡 1 弥生時代中期後葉、1 辺約 8m の平面円形の竪穴建物。
中央に炉があり、上面でサヌカイト製の石剣が出土した。
- ・ 土器溜り 弥生時代の中期後葉の土器が廃棄された穴を 4 か所で確認した。
- ・ 埋甕 弥生時代の中期後葉の甕がほぼ完形の形で埋められて見つかった。
- ・ 掘立柱建物跡 1 南北 2 間×東西 1 間(約 3m×約 2.5m)の掘立柱建物跡。柱穴は隅丸方形を呈している。出土遺物などから奈良時代の建物跡と考えられる。
- ・ 掘立柱建物跡 2 南北 2 間×東西 2 間(約 4m×約 3m)の掘立柱建物跡。柱穴は隅丸方形を呈している。出土遺物から奈良時代の建物跡と考えられる。
- ・ 掘立柱建物跡 3 南北 2 間×東西 2 間(約 5m×約 3m)の掘立柱建物跡。柱穴は円形

を呈している。また、時期は不明ながら建物と重なるようにL字状の柵跡を検出している。周辺のピットからは2枚の平安時代の土師器皿が重なった状態で出土しており、祭祀に関係するものと考えられる。埋土の類似性などから、建物跡3も同時期のものと考えられる。

今回の調査では、弥生時代中期後葉、奈良時代、平安時代の遺構を確認することができた。豊富町の市川右岸地域では、これまで古墳時代後期から平安時代にかけての御蔭中筋遺跡を除いて、ほとんど遺跡の存在が知られていなかった。今回の調査で、弥生時代中期後葉の竪穴建物跡を確認し、多数の土器溜り、埋甕、サヌカイト製の石剣が出土したことは、より古い時代から豊富の地に人々が生活してきたことを示す重要な成果となった。

一方で、弥生時代、奈良時代、平安時代といった断続した時期の遺構が確認されたこと、建物も重複がほとんどなく、建て替えも少なかったと考えられることから、集落は短期間で存廃を繰り返したと想定できる。遺跡は市川の河岸段丘にあたる。発見された遺構は氾濫や水はけの悪さと戦いながら生活した過去の人々の営みの一端を物語るものとして注目される。



御蔭一本木遺跡発掘調査地



調査地全景（西から）



竪穴建物跡 1 (北から)



掘立柱建物跡 1 (西から)



掘立柱建物跡 2(西から)



掘立柱建物跡 3(西から)



弥生土器溜り出土状況(西から)



弥生土器溜り出土状況(北から)



弥生土器埋甕出土状況(西から)



土師器皿出土状況(南から)